Forum

【女性だけの座談会】を振り返って

編集部

2024年2月28日に行った**第1回「女性だけの座談会」**の模様を、前号（3月号）に掲載しました。予想はしていましたが、これまでのどの記事よりも多くの声と反響を頂きました。ありがとうございました。

出席者の中に子育ての経験がある、または子育て中という方が5人もいらっしゃいました（赤ちゃんも1人）。筆者自身、これまで子供を育てながら音響を続けている女性と出会ったことがなかっただけに、これはよい機会と考え、話題の中心を出産と子育てとしました。

会社などへの批判をどうしても含む内容だったため、すべてを掲載できたわけではありません。それでもなるべくカットせずに載せたところ、協会誌史上最も長い24ページものスペースを取ることになりました。全文を読むのは大変だと思いますので、そこで出て来た問題を抜粋で紹介します。様々な議論がここから生まれることを願います。

なお、掲載の際にタイトルを「Kiss Today Good-by」としたのですが、これはミュージカル『コーラスライン』のクライマックスで歌われる「WHAT I DID FOR LOVE（愛した日々に悔いはない）」の冒頭の歌詞から取りました。怪我をして踊れなくなったらどうするのかと問われた若いダンサーたちが、「それでも構わない。愛した日々に悔いはないから」と歌うのですが、ここでは「今日にさよならのキスを」という語意の通り、今日の状況を何とか変えたいと思う皆さんの思いから、タイトルとしました。

出産は悪いこと？：まず大問題は、出産するなら会社を辞めろという風潮があること。だから女性は採用しないという会社も未だにあるようです。このような会社では、そもそも女性の先輩が少ないために、若手の女性社員が参考にすることができませんし、相談することもできません。入社した当座は、自社に産休制度や育休制度があることを知らなかったという声もありました。

そのため、妊娠したことをなかなか会社に言い出せず、あわや流産寸前になるという非

常に危険な体験をした人もいたそうです。

タイムラインのズレと仕事へのプライド：育児となると一般職の人でさえ、子供のお迎えのために早退しなければならないなど、時間の制約がありますが、舞台の仕事ではその制約はさらに大きなものとなります。

ここから二つの問題が生まれているようです。

一つは、出産後、音響の仕事に戻っても現場に出ることは難しいこと。もう一つは、他の人より早く帰ることへの後ろめたさが、プライドを傷つけることです。

現場へ戻りたい：今回出席した５人の子育て経験者のうち、出産後すぐに現場に戻れたのはお一人だけでした。それも現場に出ている間、子供を見てくれる両親が近くに住んでいるという幸運(？)があったおかげです。

皆さん、現場は楽しいと思っており、理想は現場への復帰なのですが、タイムラインの違いからそれは難しい。ただ、ひとまず事務仕事や倉庫の管理などで会社に復帰することはできているようでした。

すると、たとえばリモートで仕事をこなすとか、仕事を細分化してもらい、参加できる時間だけ参加するという形を採るという対策方法が考えられます。

中には、現場の仕込みから初日までの手伝いやバラシの手伝い、倉庫の荷下ろしや後輩への指導などを主に行っている育児中の人がいました。

育児に手間がかかるのは10年くらいと割り切って、それまでは事務職をこなし、その後、現場へ戻れればよしという意見もありました。

一方で、技術革新の早いジャンルだけに、10年も現場を離れると技術的に追いつけず不安だという相反する声もありました。

それに対しては、会社としっかりコミュニケーションを取り、なるべく現場に近いところにいて、自分でも公演を見るなどして感覚を養っておけば大丈夫だという意見もありました。

プライドを傷つけられることが大問題：意外とこれが負担なのではと思えたのが、プライドの問題です。もともとわれわれの仕事は芸術性と技術力で勝負するものだけに、仕事でのポジションや内容などで自分の価値を認めてもらえず、苦しむ人が多くなりがちかと思います。加えて、出産・子育てのために会社を休むと、楽をしていると捉える風潮がある社会ですので、プライドを維持するのがかなり難しいようです。

これに対しては、会社の社風、すなわち経営者の考え方が大きく影響すると思います。５名の子育て後に仕事に復帰した人のうち２人が同じ会社の人だったということが、そのことを端的に表わしています。所属する会社の経営者が女性特有の問題にも関心を持ち、的確に対応して下さったわけです。

フリーの人はどうしたら？：フリーで子育て中という人も参加していました。育休、産休制度はフリーの人にはありませんし、育児休業給付金や出産手当金も被雇用者ではないためにもらえません(受け取れるのは、出産育児一時金、妊婦検診の費用の補助、国民年金の免除など)。また、仕事を発注してもらうにも時間の制約があることを理解した上で発注してもらわなくてはなりませんので、今、現在が本当に大変だと言っていました。

この業界はフリーの立場の人が多いだけに、これはしっかり考えなければいけないと

いうことを感じました。会社であれば会社の中で考えればよいことですが、社会の中で制度化されていないことですので、音響業界全体、舞台業界全体が力を合わせて、制度化を働きかけなければなりません。

その人のアイデアとして、発注側と受注側がそれぞれの事情を知った上で仕事を依頼する「マッチング」という話が出ました。このマッチングについては、育児中の女性ということに限らず、フリーの人たちにとって待望されていることです。既成のマッチングアプリもあるようですが、それがどのくらい機能しているか継続して見て行きたいと思います。

女性にはタイムリミットがある：子供を生むために女性には生理があります。体の一部が剥離する痛みだけでなく、ホルモンの分泌の関係で、精神的にもバランスが崩れた状態になりがちです。残念なことに男社会ではこれが理解されずに来ました。体調が悪くても言い出せずにいるというのも、まわりの理解が足りず、心ないそしりを受けることがあるからです。

ただ、本当に理解されないのか？　男性の上司であっても妻帯者ならばごく普通に生理に関する知識はありますので、相談という形で自分の体の状況について気兼ねなく話してはいかがでしょうか。

医学が進歩して、高齢出産のリスクは軽減されて来たとはいえ、出産するには体のタイムリミットがあります。2022年の日本の平均初産年齢は30.9歳というデータが発表されています。音響家としてのキャリアを形成する途中、一番大事な時機にこの出産のタイミングが来てしまいます。今回参加された人の中で30代が多かったのも、タイムリミットが大きな悩みだということを示しているようです。

卵子凍結について調べているという人もいました。そこまで考えるほど真剣な悩みだということに真摯に向き合わなければなりません。出産という自然なことが自然にできない状況はおかしいということを、声を上げて言うべきです。

しかし、気づけば友人はみんな子どもを育てるという段階に進んでいるのに、今の自分は将来をイメージすることがまったくできないというジャスト30歳の人の声には、口を閉ざすしかありませんでした。これから10年間子育てをやり、その後40歳で復帰したとしてどうするのか？　もっと早く復帰するにはどうしたらよいのか？

海外の事情：海外で暮らした経験のある人から、女性が仕事を持っている場合、海外ではベビーシッターやハウスシッターを頼むことが多いという話がありました。

筆者は学生としてフィンランドに２年間いたことがありますが、仲間の女子学生たちの多くがベビーシッターをアルバイトでやっていました。中には住込みでという学生もいましたが、これは日本の住宅事情では難しいかもしれません。また、日本では子供の面倒を他人が見ることに対して資格を持っていることなど法的な制約が多いようですが、待機児童の問題などがニュースになるたびに、ベビーシッターが選択肢に上がって来ないことを不思議に思っています。

復帰にあたっての考え方：仕事も家庭も子育ても100％やろうとは望まない方がいいという声がありました。無理をせずに、ケースバイケースでこなして行った方がよいという意

見です。

ですが、人によってはすぐに以前のように現場でバリバリ働きたいという人もいるでしょう。どのようなケースであっても対応できる制度や考え方が生まれることを願いたいと思います。

まとめに代えて：今回の座談会では、本音を語れる雰囲気作りを第一に考えました。

進行役の鈴木三枝子さんが最後に言っていたように、雇用する側にも事情があるわけですが、ここでは両方の立場を考えてバランスを取るということはやっていません。それはこれからの作業になります。本誌でも継続して意見を求めて行きたいと考えています。

最後に：今回の座談会で皆さんのお話しを聞いている中で、あまりパートナーたちが登場して来なかったことが気になりました。たぶん同じ会社や同じ業種の男性たちだと思うのですが、「うちは、旦那が子育ても一緒にやってくれるので安心です」というような話はありませんでした。

自分のことを言いますと、筆者は二人の娘の父親です。パートナーも働いていたため子供と接する時間が多かったのですが、子育てほど面白く、素晴らしく、自分を豊かにしてくれる体験はないことを実感しています。女性男性に関係なくすべての人にぜひ体験して頂きたい。この座談会を主催した本心は、案外そこにあったのかもしれません。

（文責：吉澤 真）